

Space, Architecture and Function of Market Towns in the Province of Suo and Nagato. : Case Study of Sasanami-ichi, Akiragi-ichi and Kano- ichi

麻生, 由季
九州大学大学院芸術工学府

<https://doi.org/10.15017/17132>

出版情報 : 九州大学, 2009, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

序 章

1. 既往研究の整理と研究の位置づけ

日本の近世都市は領国における政治経済の中心機能を担った城下町のほかに門前町・港町・宿場町・在郷町・市町などといった在方の都市より構成される。前者については小野均の城下町論¹⁾、後者については豊田武²⁾による諸類型に捉えられて以来、多くの研究蓄積がある。しかし、門前町・港町・宿場町でも市が立ち、門前町・港町にも宿があり、在方の都市的な場の機能は多様で複合的である。従来、これらは別々の研究文脈において扱われてきたために、在町・在郷町という2つの用語が生じたり、現象面を捉えて宿場町・港町・門前町といった機能や立地条件から用語が付与されてきたりした。

近年、これらを一括して在方町として捉える概念が提示されている³⁾。今まで用いられてきた門前町・港町・宿場町といった名称で呼ばれる在方の都市を、近世都市の一類型として把握して、総合的に空間と社会を捉えるという視点である。

この在方町のうち、門前町・港町はそれぞれ元来ある寺社や港といった核となる施設やその立地に依り形成され、在方町のなかでは特異な存在である。門前町に関しては伊藤裕久氏⁴⁾、港町に関しては宮本雅明氏⁵⁾により研究が進められ、都市の空間と社会の実態が明らかになりつつある。

しかし、それ以外の内陸における街道沿いに計画的に配置された宿場町や定期市が開かれると考えられている市町に関しては必ずしも明らかでない。

宿場町については、交通史学の観点から、陸上交通体系の中心である宿駅・伝馬制・助郷制に関する研究が主体に行われており、主に宿駅機能に分析の力点がおかれ、空間・社会的な観点からの研究は少なかったが、1980年代における自治体史の発刊が進められる中で個別の宿場研究も行われるようになり、これらの観点からの研究が進めらつつある。

社会的側面から、町の社会構造に着目した渡辺浩一氏⁶⁾は個別の町が役負担の組織であり、窮民救済や祭礼運営といった共同組織も果たしたという実態を示し、深井甚

三氏⁷⁾は社会的結合と地縁的結合組織との関係を項目毎に分析している。

空間的側面から、土田良一⁸⁾は宿駅機能における運送機能である伝馬役という街道を支える交通夫役の存在形態とその編成、変遷過程とその配置及び特権商業の関係について東国城下町において事例研究を行っている。建築史学からは、数々の伝統的建造物群保存調査が行われているが、個別研究に終始している。

このように、宿場町は宿駅機能に特化した町だと考えられ、主に宿駅機能に関する研究が進められてきた。近年では社会構造に着目した研究もあるが、分析の力点は主に宿駅機能に置かれているため、宿場町における商業機能等の視点が少なく、都市の空間・社会の実態については判然としていない。

一方、定期市が開かれると考えられていることから特に商業機能に注目して捉えられる市町に関しては、空間・社会の観点から近年特に研究が進んでる。

社会的側面から、杉森玲子氏⁹⁾は商業や流通の担い手である商人に着目し、商人がそれぞれの立場からよってたつところの売場のあり方や在地社会における都市的要素からその性格について検討し、売場や市場の本源的形態についての検討を行い、市における売場の形態や市の立てられる在方町の空間構造、売買に関わる者の性格など商業や流通を構成する諸要素について検討している。そのなかで商品を路上で交換する「市」における売買、常設店舗たる表店を構える見世売りの集合である「町」における売買、商人を泊める「宿」における売買、という3つの売場の形態について明らかにした。これは商業機能の3つの売場の形態をそれぞれが行われた場と関連づけて検討しており、商業機能を考える上で重要な視点を提示している。

空間的側面から、伊藤裕久氏¹⁰⁾は会津の在方市町を題材として、市立てと市立てに適応した町割・屋敷地割の関係を近世市町の形成過程を分析するなかで明らかとし、市町における町家の形成とその展開を示した。市町の町家に関しては、宮本雅明氏¹¹⁾は市立てが都市空間に与える影響を会津城下町を題材とし、城下町の空間構造と町家の形成過程について、店舗部分が後に付加されたとみられる特徴的な町家の成立経緯を市場商業と関連付けた。続いて大場修氏¹²⁾は会津の旧永野村を素材として農家から店機能を備えた町家の形成過程を、19世紀前期は常設店舗の成立期とし、19世紀中期は常設店舗の定着期とし、さらにそれ以降はさらなる商業機能の活発化に伴う店舗機能の拡張期と位置づけた。

しかし、これらの研究は商業機能の分析に終始しており、宿駅がある町においてもその宿駅機能については触れていない。また、杉森氏が指摘する商業機能のなかの「市」

と「町」の関係については論じているが、「宿」との関係については判然としない。さらに市立てが遅くまで残った東国を題材とした事例が多く、市立てが早くに衰退したとされる西国についての事例はほとんどみられない。

西国の市町に関しては、1960年代に歴史地理学の観点から小林健太郎¹³⁾による周防国・長門国（以下防長）の研究がある。小林は史料が豊富に残る防長において、中世における市場の存在を指摘し、「市」が語尾に付く多くの小名の存在から、中世末から近世初頭にはかなり広範に流通活動の結節点として多くの市町が成立したとし、これによって防長両国には市町が多く存在したと考えられてきた。近年でも小林の解釈を受けて、藤田裕嗣らによる研究があるが¹⁴⁾、これらの研究は空間と社会の関係から論じておらず、その形態は判然としない。

このように市町とは商業機能に特化していると捉えられ、その宿駅機能に関しては論じられてこなかった。防長両国における市町のように、文献史料にみえる「市」が付く多くの小名（字）の存在から、市町は漫然と定期市が開かれる商業機能に特化した町であると認識されているものの、その実態は定かではない。小林が取り上げた防長の市町は慶長期49カ所、寛永期40カ所あり¹⁵⁾、さらに近世後期に編纂された史料に62カ所記される¹⁶⁾。これらの中には、街道沿いに立地する市町も存在することから、宿泊機能や運送機能を担った宿駅機能に特化した市町も存在したと考えられ、また定期市が開かれることから商業機能に特化した市町も存在したと考えられ、これらの両方が備わった市町もあると考えられる。

よって本研究は、史料が豊富に残る西国に位置する防長の市町において、空間と社会の形態を空間・建築・機能の分析を通して明らかにすることを目的とし、この目的に照らして、佐々並市・明木市・鹿野市を題材として、空間構成と機能との関係、建築構成と機能との関係及び杉森氏が指摘した市町における商業機能の3つの形態である「市」「町」「宿」との関係について分析を行い、近世在方町の空間と社会の形態の一端を解明する一助としたい。

2. 論文の方法・論文の構成・史料紹介

以上の目的を達成するために、本研究の方法と論文の構成を示し、各章で用いる重要な史料について紹介する。

1章で取り上げる佐々並市・明木市は萩・山口と三田尻を結ぶ萩往還に位置する。

萩往還は毛利氏の参勤交代路で特に重要視された街道で、宿駅機能が重要視されたと考えられ、宿駅機能に特化した市町であると考えられる。また、3章で取り上げる鹿野市は三斎市が開かれたことが知られ、商業機能に特化した市町であると考えられる。これら宿駅機能に特化した市町・商業機能に特化した市町という異なった機能を持つ市町を題材とし、それぞれの特徴を抽出することにより、防長の市町の空間と社会を読み解く指標を得ることができると考える。

本論文は全5章からなり、研究の背景、既往研究と本研究の位置づけ、研究の方法・論文の構成・史料紹介を述べた序章に始まり、第1章から第3章までを本論とし、終章で本研究の総括を行い、結論とする。

1章では定期市が開かれず、宿駅機能に特化した佐々並市・明木市を取り上げる。宿泊機能・運送機能・商業機能に着目しつつ、文献史料・絵図史料を用いて市町の形成を考察し、絵図史料を用いて空間構成及び機能配置の分析を行い、空間構成と機能の関係を明らかにする。

本章で用いる史料のうち重要なものは、佐々並市・明木市ともに残される、宅地レベルでの機能を窺える絵図史料である。

佐々並市に残されるのは、徳山藩主毛利淡路守が徳山から萩に向かう際、宿泊の割り振りのために作成された万延元年（1860）「毛淡路守様御来萩二付御宿割図」¹⁷⁾である。往還沿いに居住者名を記し、役職・宿泊者名・宿泊人数を附箋で貼り示している。これより宿泊機能を担った家の配置がわかり、文献史料と重ねて分析することにより、佐々並市の空間と機能の関係が分析できる。

明木市に残されるのは、萩藩最後の検地に伴い作成された宝暦12年（1762）「阿武郡明木村御蔵入畠方小村五拾九所之内六ヶ所」¹⁸⁾である。これは筆ごとの番号、地目、その面積・地料・名前及び道、水路、背後の土地利用が記される。これにより、宿駅機能を担った家の配置がわかり、さらに詳細な分析により、宿泊機能・運送機能の配置を読み取ることができ、明木市での空間と機能について分析が可能である。

2章では前章で取り上げた佐々並市における建築構成を町並み全体の建築構成を捉えることができる明治期の絵図史料、寛政期の一部の町における連続平面図及び天保期の家相図、加えて建築遺構調査の結果を用いて、通時的に町ごとに捉え、前章で検討した結果と照らし合わせて、建築構成と機能の関係を明らかにする。明木市では町並みの建築構成を描く史料がなく、建築遺構も残らないが、近世を通じて空間構成が変わらない佐々並市に着目することで、宿駅機能を担った防長市町の前基的構成を知

ることができる。

本章で用いる史料のうち重要なものは、佐々並市全体を捉えることができる明治19年(1886)『明治拾九年 家屋届』¹⁹⁾である。土地台帳作成以前の住所である番屋敷、居住者名、敷地内の建物名、階数、坪数、屋根材が記載され、建物の間取り兼配置図が添付されたものである。これにより明治19年の連続平面図を作成でき、明治19年の佐々並市の建築構成を把握することができる。

また、上ノ町と中ノ町の一部を描く「佐々並御休木村源蔵所差図」²⁰⁾「佐々並御休清兵衛所差図」²¹⁾の2葉の差図である。作成年代は記載されないものの、周辺の山口・小郡に巡見使来国の際に作成された寛政4年(1792)年紀の御客屋等の差図が残されること、貴布祢神社に残される寛政6年の棟札に井本清兵衛の名がみえることから、佐々並市においても同時期に作成されたと考えられる。この差図は共に周辺の民家を貼り合わせたもので、御客屋井本家と2軒の民家、御客屋木村家と3軒の民家を描いている。これらより寛政4年上ノ町・中ノ町連続平面図を作成でき、寛政期の上ノ町・中ノ町の一部の建築構成を把握することができる。

さらに、建築遺構調査は平成18・19年度の山口県萩市佐々並市伝統的建造物群保存対策調査²²⁾に基づき行われたもので、佐々並市の町並みを構成する伝統的建築物の悉皆調査を実施し、来歴の聞き取り、構造形式の採取、現況平面と現況断面の採取・実測、配置図の採取、痕跡の採取と平面図の復原を行い、佐々並市に残された伝統的民家等40軒の調査・寺社3軒について調査を実施した。この調査から得られた成果により、久年での建築構成と機能の特徴的な関係を導くことができ、さらに江戸期・明治期の建築構成と照合することで通事的考察を行うことができる。

3章では定期市が開かれ、商業機能に特化したと考えられる事例として鹿野市を取り上げる。市立てに関する文献史料、町並みの計画を描いた絵図史料及び建築構成の変遷について記される文献史料を用いて、建築構成と機能の関係及び商業機能の「市」「町」「宿」について検討する。

本章で用いる史料のうち重要なものは、鹿野市の移転に際して作成された町の計画図である、天和3年(1683)12月7日付「鹿野市并同町割図」²³⁾である。街道及び街道に直交する脇道が描かれ、北を上市として南北に街道が通り、東側に35軒・西側に32軒の宅地が並ぶ。宅地には本屋・長屋・空地が記され、それぞれの間数とそれらの合計が記される。これより、鹿野市の設定当初の建築構成を分析することができる。

次に『重次調之』²⁴⁾には鹿野市の三斎市の始まりや岩崎重次家の建築構成の変遷に

ついて詳細に記される。これは鹿野市の移転・建設及び定期市の開催に深く関わった岩崎重信の子孫重次により記されたものである。これにより、重次家の建築構成を分析することにより、鹿野市の設定当初の建築構成とその変遷を分析することができる。

終章では、各章における成果を要約し、成果から導かれた結論を示し、今後の課題を述べて結びとしたい。

注

- 1) 小野均『近世城下町の研究』(至文堂、1928年)
- 2) 豊田武『日本の封建都市』(岩波書店、1952年)
- 3) 伊藤裕久「戦国期上吉田宿の町割・屋敷地割とその変容」『都市と商人・芸能民：中世から近世へ』(山川出版社、1993年)、伊藤裕久他「宇治門前町における近世御師屋敷の空間構成」(『日本建築学会計画系論文集 552号』、2002年)
- 4) 宮本雅明・中川等『伝統的歳集住環境の空間秩序生成に関する研究』(住宅総合研究財団、1990年)、宮本雅明「東国城下町のマチ空間」『都市空間の近世史研究』(中央公論美術出版、平成17年)
- 5) 渡辺浩一「近世都市史研究と住民結合」『近世日本の都市と民衆』(吉川弘文館、平成12年)
- 6) 渡辺浩一「近世後期における在郷町の住民結合」『日本文化研究所研究報告 別巻別巻第24集』(東北大学日本文化研究所、1987年)、
- 7) 深井甚三「宿と町」(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』第二巻、東京大学出版、1990年)、同『幕藩制下陸上交通の研究』(吉川弘文館、平成6年)
- 8) 土田良一「上諏訪の困窮過程と地域構造—伝馬役負担の変質過程—」(『新地理』第20巻1号、昭和47年)、同『近世宿駅の歴史地理学的研究』(吉川弘文館、1994年)
- 9) 杉森玲子「近世の町と商人」(佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史6 都市社会史』山川出版社、2001年)、同『近世日本の商人と都市社会』(東京大学出版会、2006年)
- 10) 伊藤裕久「近世市町の都市形成」『近世都市空間の原景』(中央公論美術出版、平成15年)
- 11) 前掲4) 宮本雅明『都市空間の近世史研究』
- 12) 大場修・石川祐一「近世在方集落における町家形成(前編) - 常設店舗の成立と町場の創出 -」(『日本建築学会計画系論文集 510号』、1998年)、大場修・石川祐一・木名瀬佳世「近世在方集落における町家形成(後編) : 会津旧永井野村における店棟造りの成立過程」(『日本建築学会計画系論文集 514号』、1998年)、大場修『近世近代町家建築史論』(中央公論美術出版、平成16年)
- 13) 小林健太郎「近世初頭萩藩領における市町の分布と類型区分」(西村睦男編『藩領の歴史地理—萩藩—』(大明堂、1968年)
- 14) 藤田裕嗣編『中・近世における都市空間の景観復原に関する学際的アプローチ』(平成15年度～18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)
- 15) 山口県編『山口県史 史料編 近世3』(山口県、平成13年)所収
- 16) 山口県文書館『防長風土注進案1～22』(マツノ書店、昭和39年)
- 17) 「毛淡路守様御来萩ニ付御宿割」(土山家文書)、山口県文書館
- 18) 『阿武郡明木村御蔵入畠方小村五拾九所之内六ヶ所』、萩市旭総合事務所蔵
- 19) 『明治拾九年 家屋届』、萩市旭総合事務所蔵
- 20) 「佐々並御休木村源蔵所差図」、山口県文書館蔵
- 21) 「佐々並御休清兵衛所差図」、山口県文書館蔵
- 22) 『萩往還佐々並市伝統的建造物群保存対策調査報告』(2008年、萩市)
- 23) 「鹿野井同町割図」(岩崎家文書) 山口県文書館蔵
- 24) 『重次調之』(岩崎家文書) 山口県文書館蔵